

第 29 回日本作業療法教育学会一般演題抄録集

【発表 1】

教育における作業：フレイレとデューイと里見から

○吉川ひろみ（県立広島大学）

Key words：作業，教育学，理論

【目的】

筆者は、プレイバックシアターと倫理研究会の活動を通して、doing や行動に焦点を当てた教育論を知るようになった。本論では、ジョン・デューイ（1859-1952）とパウロ・フレイレ（1921-1997）の考えが、作業を中心とした教育であったと主張する。最後にフレイレの著作の翻訳者、里見実（1936-2022）の指摘と教育実践と作業療法との類似性を指摘する。

【作業療法の誕生と教育学の接点】

プラグマティズムと民主主義の論者として知られる教育学者デューイは、1922 年に「作業療法の哲学」という論文を書いた精神科医アドルフ・マイヤー（1866-1950）と親しい友人だった¹⁾。「Learning by doing（なすことによって学ぶ）」というデューイの教育方針は、自分の作業で自分自身が変化するという作業療法の本質を表現していると考えられる。

【デューイの doing と民主主義】

デューイは、作業を通して学習することを重視した。1902 年に設立した「実験学校」では、occupation として工作、調理、裁縫などが主題探究型プロジェクトとして行われた。デューイは、ただの doing だけでは十分ではない、生きた経験や興味にもとづく活動を取り入れ、科学的に系統立てて組織化することが重要だと述べたという²⁾。これは、現代の作業療法が、クライアントにとって意味のある作業に焦点を当て、クライアントの作業を基盤として実践する形へと発展していることと合致する。

デューイは、個人として日常の活動を行うことだけでなく、他者と協働して問題解決に取り組むことで生じる学習を重視し、これが民主主義の普及につながると考えた²⁾。個人間や社会の中で生じる相互交流を指す「トランザクション」や、他者との関係

性を育みながら暮らす「連帯する生き方（associated living）」は、作業的公正を考える上で重視されている概念でもある^{3, 4)}。デューイは民主主義の実現のためには平等主義が基盤となると主張した。クライアントと作業療法士がパートナーとして協働する作業療法実践は、まさに平等主義の実践であるし、誰もが自由に作業を選択でき、その作業を通して健康・幸福になれるという作業的公正は、民主主義社会が目指す方向と一致する。

デューイは 1919 年に来日し、3 か月弱滞在し講演を行なったが、当時の日本の民主主義に賛同する学者たちは、平等主義をあまり歓迎しなかったようだ⁵⁾。天皇制、愛国心、親孝行と平等主義は相容れなかったのだ。この状況は、協働関係を基盤とする作業療法が、医療や学校の階層組織に馴染まないことと似ている。

平等主義の実現には、クライアント中心の作業療法の確実な実践とエビデンスの蓄積、組織や社会の改革が必要であろう。

【フレイレの行動と省察】

ブラジルの教育学者フレイレは、教師が学生に知識を伝達するような一方向的な教育形態を銀行型教育と呼び批判した⁶⁾。銀行型教育では、教師が教えた通りに知識を蓄え、行動する学生が優秀だということになる。作業療法の目標はクライアントが日常生活の活動に参加できるようになることである⁷⁾。クライアントが治療者の決めた計画に従って行動するだけでは、主体的生活者になることはできない。

フレイレが主張するのは、対話型教育、問題解決型教育である⁶⁾。まず何が問題かを意識化し、対話しながら行動する、そしてその行動を振り返る（省察する）のである。この意識化、対話、行動、省察を繰り返すプロセスこそが教育であるとした。フレイレのいう行動は、自らの世界と向き合い何かを為すことであり、作業に相当する。作業の影響力を増すためには省察が必要である。フレイレは 20 年前に書いた自著を省察して本を出版した⁸⁾。この教育プロセスを自身で体現している。

作業療法において、自分の作業について話したり、

作った作品を展示したり、その日に取り組んだことを記録する活動日記⁹⁾を書いたりすることは、省察に相当する。Clarkは脳卒中を経験した同僚の作業について報告した¹⁰⁾。この論文で示されている作業ストーリーテリングは省察に、作業ストーリーメイキングは対話と行動に相当する。省察は、時空間を含めた作業経験をストーリーとして理解する機会となり、作業を基盤とした実践は、現在から未来に続く作業ストーリーをクライアントと作業療法士が作り上げるプロセスだととらえることができる。

【里見の労働】

里見は、大学教員としてフレイレの教育学をテーマとした公開講座を開催し、教育学の授業の中で、デューイやフレイレが主張する教育を実践した^{11, 12)}。受講者にとって考えやすい例題をあげ、受講者間、教員と受講者間の対話によって授業を展開した¹²⁾。たとえば、「18歳にもなれば、哲学で、テコとは何かを学ぶ。だが、12歳の百姓の息子であれば、アカデミーさっての力学の専門家よりもテコの上手な使い方を知っている（ルソー「エミール」から）」についての問いは、「百姓の息子はテコとは何かを知っていることになるか」である。作業療法教育に置き換えるなら「臨床実習開始前の学生は作業療法とは何かを学ぶ。だが、子どもの頃から作業療法士の仕事を見て、手伝いを続けてきた人は作業療法を知っていることになるか」ということになるだろう。この問いへの回答からdoing、行動の価値が浮かび上がる。

里見は、本来自己形成に不可欠であった「労働」が、資本主義経済の中で与えられたものを洪々こなすようになってしまったことと、「教育」も学生が与えられた課題をこなすようになってしまったこととの類似性を指摘した¹²⁾。ウィリアム・モリス（1834-1896）の言葉「芸術は労働における人間の喜びの表現」や、宮沢賢治（1896-1933）の日々の労働を創造の喜びとする農民芸術を引用し、労働における喜びと創造の奪回を唱えた。里見は「本を読んだり、ものを調べたりするという学生の行為は、労働ではないだろうか……労働という概念を生産労働に限定せずに、人間の多面的な活動の中に内在している普遍的な過程としてとらえてもよいのではないか」と述べ

ている。

この主張の労働を作業と読み替えることができる。学生が熱心に勉強すること、子どもが遊びを発展させていくこと、手間暇を惜しまず趣味に没頭することは、喜びと創造をもたらす作業といえる。受傷や発症前には簡単にできていたセルフケアを繰り返し練習するだけの作業療法ではなく、喜びと創造をもたらす作業を経験する場としての作業療法を普及させたい。

【結論】

上述した3人の教育学者の主張から、教育において作業の視点が重視されていることがわかる。作業（doing、行動、労働）を丁寧に扱い、省察と対話を繰り返す場としての教育を考えたい。また、創造と喜びのある作業を、教育でも実践でも展開していきたい。

【文献】

- 1) Anderson LT & Reed KL: The History of Occupational Therapy: The First Century. Slack, 2017.
- 2) 上野正道：ジョン・デューイ 民主主義と教育の哲学。岩波書店、2022.
- 3) Aldrich RM: From complexity theory to transactionalism: Moving occupational science forward in theorizing the complexities of behavior. Journal of Occupational Science, 15(3), 147-156, 2008.
- 4) Aldrich RM: Strengthening associated living: A Deweyan approach to occupational justice. Journal of Occupational Science, 25(3), 337-345, 2018.
- 5) 岡本珠代：デューイと大正デモクラシー。比較思想学会 26:90-98, 1999. https://www.jacp.org/wp-content/uploads/2016/04/1999_26_hikaku_12_okamoto.pdf (2024年8月閲覧)
- 6) パウロ・フレイレ（三砂ちづる訳）：被抑圧者の教育学 50周年記念版。亜紀書房、2018.
- 7) World Federation of Occupational Therapists: About occupational therapy. 2012. <https://wfot.org/about/about-occupational-therapy> (参照日

- 2024 年 8 月閲覧)
- 8) パウロ フレイレ (里見実・訳) : 希望の教育学.
太郎次郎社, 2001.
- 9) 高木雅之, 其阿弥成子, ボンジェ・ペイター :
地域在住中高年者に対する活動日記を用いた集団
プログラムの効果検証に向けた予備的研究. 作業
療法 39, 153-161, 2020.
- 10) Clark F: Occupation embedded in a real
life: interweaving occupational science and
occupational therapy. 1993 Eleanor Clarke Slagle
Lecture. Am J Occup Ther 47(12) : 1067-1078,
1993.
- 11) 里見実 : パウロ・フレイレを読む 抑圧から
の解放と人間の再生を求める民衆教育の思想と実
践. 太郎次郎社, 1993.
- 12) 里見実 : 働くことと学ぶこと わたしの大学で
の授業. 太郎次郎社, 1995.

【発表 2】

精神障害領域における OSCE の検討と挑戦
ー 昭和大学での導入に向けてー

○古賀 誠（昭和大学保健医療学部リハビリ
テーション学科作業療法学専攻）

嘉部 匡朗（昭和大学保健医療学部リハビリ
テーション学科作業療法学専攻,
昭和大学横浜市北部病院リハビリ
テーション室）

小林 崇志（昭和大学保健医療学部リハビリ
テーション学科作業療法学専攻,
昭和大学附属烏山病院リハビリ
テーション室）

佐藤 範明（昭和大学保健医療学部リハビリ
テーション学科作業療法学専攻,
昭和大学横浜市北部病院リハビリ
テーション室）

青木啓一郎（昭和大学保健医療学部リハビリ
テーション学科作業療法学専攻）

Key words：客観的臨床能力試験，精神障害，
動画資料

【緒言】

理学療法士・作業療法士養成施設指導ガイドラインに関する Q & A（2022）では，臨床実習前後の評価方法に関する明確な規定はないものの，臨床実習後の評価が望ましいとされている¹⁾。こうした評価について，学生の臨床実習における基本技能・態度を評価するための客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination: OSCE）を導入している^{2)~5)}。OSCEは1975年にHarden RMらによって考案された臨床技能を評価する試験形式であり，日本では1993年に川崎医科大学で初めて導入され，全国的に医学教育へ組み込まれている。多くの養成校はこうした OSCE の実施は既存の成書⁶⁾や日本作業療法士協会刊行の OSCE 運用ガイド（2024）⁷⁾を使用するのが一般的であるが，我々は附属病院を有し，臨床教員制度⁸⁾とともに臨床実習の知見を蓄積してきた背景から，独自に OSCE を開発し取り組んできた。これまでに身体障害領域の OSCE の作成と運用を実施してきた。精神障害領域については，患者像の設定や教員による技能・態度の整理が遅れ，

実施が遅れた。

今回は，本学の精神科作業療法（以下，OT）の OSCE 内容を開発して，導入するまでの経緯について報告する。

【精神科 OSCE 開発に向けて】

急性期治療に特化した本学附属病院内の身体障害領域では共通した患者像を得られたが，精神障害領域は学生が診る患者像を揃える必要があった。

本学の精神障害領域の臨床実習は，附属精神科病院と附属総合病院内の精神科病棟の2ヵ所で行われる。附属精神科病院は精神科救急入院算定病棟の機能を持ち合わせており，精神科作業療法（以下，OT）は入院治療の入口でもある患者に回復感を得て，その後の治療を継続できるように役割が求められる⁹⁾。入院患者に物質使用障害患者や発達障害患者，休職した気分障害患者が増加して，OT プログラムでもその参加者は多く，臨床実習で学生も経験することが多い。一方の附属総合病院内の精神科病棟は，認知症を中心に，老年期うつ病が入院対象であった。そのような臨床現場の特徴があり，統合失調症と接する機会は減少している。

そのため，日本作業療法士協会の OSCE 運用ガイド⁷⁾の内容では，本学附属病院の OT の現場における患者像が異なり，臨床実習で経験した学生の学んだ内容を考慮する必要があった。

そこで，本学の精神科 OT における患者像に合わせた OSCE 内容の検討と開発を行った。精神障害領域での臨床経験 10 年以上，修士号以上を取得した作業療法士 4 名で臨床実習に即した模擬患者を考案し，身体障害領域の教員を加えて，評価基準，観察評価ポイントを検討して，動画制作を行った。

評価基準については，既に実施中の身体障害領域の基準を参考に，これまでの精神障害領域の学内講義と臨床実習指導内容に即した評価項目を設定した。今回の OSCE が臨床実習後 OSCE であるため，患者に対応しながら，非構成的評価をベースに半構成的評価を用いて，最終的な臨床実習指導者への報告までが学生に求められることが特徴である。

【動画資料の作成】

本学附属の OT の現場で共通して経験するうつ病

の模擬患者シナリオを作成した。学生が閲覧するカルテ情報や、課題（面接、観察評価、興味関心チェックシート）を使用した作業療法面接、指導 OT へのプレゼンテーション）を設定した。さらに OSCE を円滑に進行するための試験内容の見本や、評価者と模擬患者役の共通理解のための動画資料を作成した。

【運用方法】

評価は〈面接〉〈面接内容〉〈観察評価〉〈検査と測定〉〈プレゼンテーション〉から構成される。学生は別室で待機し、ステーションで 20 分間カルテ情報を読み込み、患者の状態を理解した後、ベッドサイドで 15 分間の OT 面接を行い、その後 10 分間でプレゼンテーションを行い、試験監督からのフィードバックを受ける。

【文献】

- 1) 篠崎真枝, 橘香織, 上岡裕美子, 大橋ゆかり: 実習前・後の学生評価 OSCE. PT ジャーナル 54 (7): 834-838. 2020.
- 2) 片桐一敏, 大堀具視: 作業療法教育における精神障害作業療法技術論部や OSCE の実践. 千葉作業療法 9 (1): 59-62. 2020.
- 3) 吉村友希: 評価実習における自己効力感を高める授業の設計と効果の検討. 作業療法 41: 481-486. 2022.
- 4) 小林幸治, 曾田玉美, 野村健太: OSCE におけるビデオを活用したリフレクションによる学生の気づきと捉え方ー作業療法学生 3 年次の臨床実習前 OSCE における予備調査ー. 目白大学健康科学研究 16: 79-87. 2023.
- 5) 川上永子, 掛川淳一, 小川修史, 杉原勝美, 森広浩一郎: 学生発語の特徴単語に着目した OSCE の教育効果. 四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要 14: 1-11. 2023.
- 6) 才藤栄一監修, 金田嘉清, 富田昌夫, 大塚圭, 杉山智久, 前田晃子他: OSCE の概要, OSCE 実施における要点, PT・OT のための臨床技能と OSCE コミュニケーションと介助・検査測定編 第 2 版: pp.10-12. 金原出版, 東京, 2019.
- 7) 一般社団法人日本作業療法士協会編集: 日本作業療法士協会版客観的臨床能力運用ガイド (2023 年度試作版): pp.3-4. 2024.
- 8) 長島潤, 青木啓一郎, 渡部喬之, 大澤彩, 鈴木久義, 鈴木憲雄, 志水宏行: 昭和大学における作業療法士臨床教育制度の導入. 第 29 回教員研修会: 230-231. 2016.
- 9) 古賀誠, 小林崇志, 佐藤範明: 精神科領域における急性期の作業療法ー 2 年間のスーパー救急の作業療法実施状況ー. 昭和学会誌 83 (5): 301-308. 2023.

【発表 3】

当校1年次作業療法学生が抱える作業機能障害の縦断的变化に関する報告

○原 悠平（千葉医療福祉専門学校）

Key words：作業機能障害，作業療法学生，作業療法教育

【諸言】

作業療法学生は、在学中に高いストレスを経験している。作業療法学生の在学中のストレスの高さは、不安や抑うつと関連しており¹⁾、不安は作業機能障害との関連が報告されている²⁾。作業機能障害は、生活行為を適切に行えず、対象者が捉える否定的な経験として定義されている³⁾。進級とともに臨床実習や実技授業も増加し、ストレスも増加することを考えると、入学直後から作業機能障害を把握し、必要があれば介入することは非常に重要である。

そこで本研究では、不安と関連している作業機能障害が1年次の1年間でどのように変化するかを明らかにし、初年度教育方法を考察することを目的とした。

【方法】

4年制の養成校である本学作業療法学生のうち、X年度1年次生に対して、担任業務の一環であり、学生状況の把握を目的としてGoogle Formsにて聴取していた作業機能障害尺度の結果を本研究の試料として使用した。1年次生24名のうち、研究参加に同意し、かつ、文書での研究説明を行い同意した者のうち、X年4月（入学直後）、X年8月（前期試験終了後）、X+1年2月（後期試験終了後）測定時のすべての時期において欠損なくデータを回収できた者のみを採用した。以後、それぞれの期間のデータについては、4月、8月、2月と表記する。

作業機能障害については、作業機能障害の種類と評価（Classification and Assessment of Occupation Dysfunction:以下CAOD）を使用した⁴⁾。CAODは、作業不均衡、作業剥奪、作業疎外、作業周縁化の4因子全16項目にて構成される7件法の評価尺度である。4月、8月、2月3群間のCAODの下位項目の比較をFriedmanの検定を使用し、p値が0.05未満の項目についてはbonferroniの多重比較検定を

実施した。

また、「入学から8月（前期）」「8月から2月（後期）」の2つの期間で、校内・校外それぞれの生活の中で感じた作業機能障害への認識と、作業療法の専門性への理解が年間を通じて変化したかを問う記述式のGoogle Formsを2月に実施した。作業機能障害への認識は、Friedmanの検定にてp値が0.05未満となった下位項目のみ、CAODの質問項目を参考に作成した（表2）。作業療法の専門性への理解は、前後期ともにどのように感じていたか、思い出して記述するように求めた（表3）。2つのGoogle Formsの記述内容を確認し、Formごとにグループ分けを行った（表2, 3）。

【結果】

X年度作業療法学科1年次生24人のうち、欠落なくすべての項目に回答していたのは17名（女性6名、男性11名）であった。作業機能障害の縦断的な変化について表1に示す。作業疎外の項目のみ群間差を認めた（表1）。

上記の結果を踏まえて、CAODの作業疎外項目を参考に記述式のGoogle Formsを作成した。期限までに回答があったのは13名であった。結果を概観すると、校内外の生活から作業疎外を感じなかったと回答した学生が最も多く、後期より前期の方が作業疎外を感じたと答えた学生は僅かであった（表2）。一方、作業療法への理解は前期より後期の方が深まったと回答した学生が最も多かった（表3）。

【考察】

前期の経験に加え、前期終了後以降に、見学実習や外部講師による作業療法概論の機会を経て、前期よりも後期の方が作業療法への理解が進むことで「作業疎外」が改善した可能性がある。山根ら⁵⁾は作業療法職理解のための取り組みにより、精神的健康状態のスコア向上を報告した。また、作業疎外の改善により精神的健康が向上したことが報告されており⁶⁾、本研究でも専門性への理解が進むことによって、「作業疎外」が改善する可能性がある。以上より、入学直後から、「専門性」について理解が進むような機会の提供の重要性が示唆された。

【結語】

本研究では、1 年次作業療法学科生の作業機能障害は、作業療法の専門性への理解によって作業疎外が改善した可能性がある。今後、入学直後からの「作業療法の専門性」への理解が促進できるような機会や授業設計を行うことが求められる。

【参考文献】

- 1) 松原笙也, 阿久津洋巳: 医療系大学生における学業ストレス過程と介入の効果. 新潟リハビリテーション大学紀要 11 (1): 13-26, 2023.
- 2) Kusumoto Y, Higo R, Ohno K: Differences in college students' occupational dysfunction and mental health considering trait and state anxiety during the COVID-19 pandemic. PeerJ 10: e13443, 2022.
- 3) Teraoka M, Kyoungoku M: Analysis of structural relationship among the occupational dysfunction on the psychological problem in healthcare workers: A study using structural equation modeling. PeerJ 3: e1389, 2015.
- 4) 寺岡睦, 京極真: 医療従事者に対する作業機能障害の種類と評価 (Classification and Assessment of Occupational Dysfunction: CAOD) の尺度特性の検証. 作業療法 34 (4): 403-413, 2015.
- 5) 山根伸吾, 三木恵美, 花岡秀明: 早期作業提供実習プログラムが作業療法学学生の職業アイデンティティに与える影響. 作業療法ジャーナル 53 (2), 2019.
- 6) 籾脇健司, 岡本理宏, 鹿田将隆: 在宅要支援・介護高齢者の作業的不公正と環境支援の関係 - CEQ を用いた検討 -. 作業科学研究 7 (1): 54-55, 2013.

表 1. 各期の CAOD と STAI の下位項目の群間差

	4月	8月	2月	p値 ^{a)}
作業不均衡	14.71±6.00	14.47±6.17	17.18±7.37	0.33
作業剥奪	7.06±3.63	8.35±5.29	7.88±4.78	0.30
作業疎外	9.06±4.30	11.47±4.99	8.18±5.31	0.04
作業周縁化	12.12±6.47	14.06±8.76	11.18±8.83	0.17

※平均値±SD, ^{a)}:Friedmanの検定^{b)}: 多重比較検定(Bonferroni法)で調整済み有意確率が1%未満の項目を示した

表 2. 1 年次生の作業疎外の変化

		生活上で作業疎外を感じたかどうか (人)			
		学校生活以外の 学校生活が単調 な日々になり、 やりたいことがな くなるような感覚 はありましたか?		学校生活以外に て、単調な日々 になり、やりたい ことがなくなるよ うな感覚はあり ましたか?	
		有	無	有	無
前期有	後期有	0	0	0	1(8%)
前期無	後期無	8(62%)	8(62%)	7(54%)	9(69%)
前期無	後期有	4(31%)	3(23%)	3(23%)	1(8%)
前期有	後期無	0	2(15%)	2(15%)	2(15%)
前期×	後期無	0	0	0	0
前期×	後期有	0	0	0	0
前期無	後期×	1(8%)	0	0	0
前期有	後期×	0	0	0	0
前期×	後期×	0	0	1(8%)	0
合計		13 (100%)	13 (100%)	13 (100%)	13 (100%)

提出結果を筆者が判断し、有:作業疎外有、無:作業疎外なし、×:不明と分類した。

表 3. 1 年次生の作業療法の専門性への理解の変化

		専門性の理解度の変化 (人)
		作業療法のことを理解できましたか?「入学 から 8 月(前期)」8 月から 2 月(後期)」の2期 間で分けて考えてみましょう。
前期>後期		0
前期<後期		11(85%)
前期○後期○		2(15%)
前期×	後期×	0
合計		13(100%)

作業療法理解度が高い期間を不等号にて表記した。

○: 前後期とも理解している ×: 前後期とも理解なし

【発表 4】

熟達化支援を目的とした事例検討会の構造設計の検討
ーリハビリテーション専門職を対象とした予備調査ー

○佐藤 純（介護老人保健施設花水木）

中島ともみ（藤田医科大学保健衛生学部）

Key words：事例検討会，熟達化，ADDIE モデル

【緒言】

作業療法士にとって事例検討会は馴染み深い教育方法である。小林ら（2022）は事例検討会に対して思考過程の共有や多様な選択肢の創出に繋がる一方で、「指導するー指導される」関係はマイナス要因であると指摘している。佐々木（2010）は事例検討会の効果を「自然と起きるに任されている」とし、セラピストの熟達過程に合わせた目標設定と十分な調整が必要だと報告している。このことより、事例検討会の進行は検討の余地があり、効果検証は課題となっている。

本調査の目的は、リハビリテーション専門職である作業療法士、理学療法士、言語聴覚士（以下、OT、PT、ST）を対象に、部門内で開催される事例検討会に対して臨床思考の熟達を促すための構造を設計し、その効果を検証することである。将来的にOTの熟達化支援に応用するための予備的な調査とする。

なお、本調査は藤田医科大学倫理審査委員会の承認（承認番号：HM23-041）を得て実施した。

【方法】

1. 対象

A介護老人保健施設の機能訓練室職員10名（OT 5名、PT 4名、ST 1名）を対象とした。

2. 事例検討会の構造設計

ADDIE モデル（Gagné-RM et al., 2007）の手順に沿って事例検討会の構造設計を進めた（図1）。このモデルは効果的な教育や研修を設計・開発するためのプロセスモデルである。以下に各手順における内容を示す。

Analysis：対象者へのインタビューにて、「発表」と「司会」にはネガティブな印象があり、「参加」には積極的かつ実践的な仕組みが望まれていることが分かった。

Design：教育目標の設定では、エリクソンの熟達化モデル（Ericsson KA et al., 1993）を参考に各熟達段階の向上が図れるよう、Analysisの結果とすり合わせて設定した。

Development：教授法略であるメリルのID第一原理（Merrill MD, 2002）を用い、教育目標の達成を目的とした事例検討会を開発した。その結果、単体の事例検討会ではなく、「準備～事例検討会～実践～振り返り」という一連のセッションとして開発され、『手引き』も作成した。

Implement：部門内で定期開催できるよう、1セッションに要する期間は3週間、事例検討会本体は一回45分程度、頻度は2週間に1回とした。

Evaluation：5セッションを1クールとし、その前後でアンケート調査を行うこととした。アンケートはカークパトリックの4段階評価モデル（Kirkpatrick JD et al., 2016）を用い、教育目標を基に作成した。レベル1「反応」の3項目は、参加や発表、司会の各役割をできそうかと思えたか？ レベル2「学習」の8項目は、各役割と検討会の要点を理解できたか？ レベル3「行動」の18項目は、各役割に求められる行動をとるこ

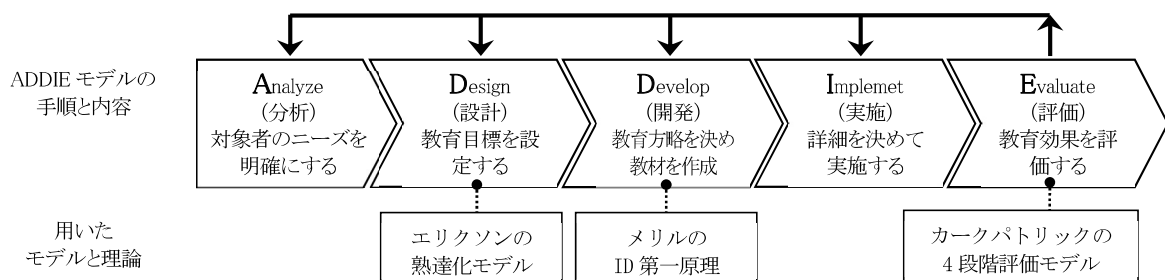


図1 構造設計で用いた ADDIE モデルの手順と内容、用いたモデルと原理

とができたか？上位熟達者の行動を経験できたか？ レベル 4「成果」の 7 項目は、部門全体に関して実践の質が向上したか？熟達化が支援しやすい部門になったか？を問う内容である。回答には Visual Analogue Scale（以下、VAS）を用い、自由記載欄についても設けた。

3. 分析

1 クールの前後でアンケートを行い、得られた VAS の結果を Wilcoxon の符号付順位検定を用いて検討し、効果量 (r) を算出した。有意水準 (p) は 5 % とした。

【結果】

アンケートの回収率は事前、事後ともに 100%。対象者の基本属性は表 1 の通りである。

表 1 対象者の基本属性 $n=10$ 名

職種	作業療法士 5 名, 理学療法士 4 名, 言語聴覚士 1 名
性別	男性 4 名, 女性 6 名
経験年数	平均 10.0 $\pm$ 8.6 年
年齢	平均 39.4 $\pm$ 15.2 歳

カークパトリックの 4 段階評価モデルのレベル 1「反応」は、「司会ができそうだと思う」で事後の VAS が有意に高く効果量は大であった ($p=0.036$, $r=0.664$)。「参加できそうだと思う」「発表ができそうだと思う」は有意差を認めず、自由記載には「ラクして参加できなくなった」「この方式なら発表できるが従来ではどうか」とあった。レベル 2「学習」では、「参加者には発表者の実践を支援するところまで求めることを理解できる」($p=0.011$, $r=0.805$) など、8 項目全てにおいて事後の VAS が有意に高く効果量は大であった。レベル 3「行動」では、「参加者として指導的役割を果たすことができる」($p=0.007$, $r=0.855$)、「発

表者として問いをもとにした事例報告ができる」($p=0.009$, $r=0.822$)、「司会者として状況に応じた進行の工夫ができる」($p=0.005$, $r=0.886$)、「熟達者を意識した行動が取れる」($p=0.005$, $r=0.889$) など、18 項目中 17 項目で事後の VAS が有意に高く効果量は大であった。レベル 4「成果」では、「対象者に提供する実践の質に向上が見られる部門である」($p=0.012$, $r=0.797$)、「既存のやり方であっても新しいことを試しやすい部門である」($p=0.008$, $r=0.844$) など、7 項目全てにおいて事後の VAS が有意に高く効果量も大であった。

【考察】

カークパトリックの 4 段階評価モデルのレベル 1「反応」にて「参加」「発表」に差を認めなかったのは、能動的な参加態度を設計に含んでいたこと、発表のしやすさが今回の事例検討会に限定されていたことが考えられた。レベル 2「学習」への成果は、『手引き』によるものと考えられた。レベル 3「行動」の成果は、「準備～事例検討会～実践～振り返り」の一連のセッションを通して実践を重ねることができたため、行動変容へ繋がったと考えられ、熟達化支援に有効であることが示唆された。レベル 4「成果」の結果からは、今回の事例検討会が部門における実践の質向上や、熟達化を育む部門体制の醸成へも成果が出せることが分かった。

卒後教育ではレベル 3「行動」、レベル 4「成果」への成果が求められる。事例検討会開催後のこれらの成果を学習者任せにするのではなく、教育目標を定めて構造設計することが大切である。卒後教育に関する方法論や効果検証は報告が少ない。今回は対象数が少なく一施設における調査であったため、今後は対象者数を増やし調査の信頼性を高めた上で、OT に特化した効果検証へと発展させたい。

【発表 5】

作業療法学生がフォトボイスを通して学ぶことは？

○渡辺 陵介（東京福祉専門学校作業療法士科）

大橋 航祐（東京福祉専門学校作業療法士科）

Key words：作業療法教育，フォトボイス，作業

【緒言】

本校では「人の生活と作業」という科目を第1学年で履修する。この科目は、人の生活と作業についての理解を深めることを目的とし、生活や作業に関する知識の伝達に加え、自身の生活を振り返ることや、障害のある方の生活について検討することを行っている。作業や生活について理解を深める取り組みとして、フォトボイスに着目した。フォトボイスはアクションリサーチの研究手法として発達したものであり、写真をもとに議論することを通して、様々な課題を発見し、それに向けた解決策を導くことなどを行う¹⁾。フォトボイスは学生自身の生活を振り返り、作業や生活について理解を深めることに適していると考えられる。しかしながら、フォトボイスを通して学生がどのようなことを学んだと感じているのかを明らかにした研究はみられない。そこで本研究は、作業療法学生がフォトボイスを実施することにより、どのような学びを得るのかを学生の感想をもとに検討することを目的とする。なお、所属機関の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

【方法】

対象者は作業療法士科第1学年の学生とした。フォトボイスは回数を重ねていくことでより深い問題の提起に繋がるが、講義の構成上困難であったため、全2回の実施とした。1回目は「日常生活で行っている作業」、2回目は「日常生活で課題と感ずる作業」をテーマに各々写真を撮ってきてもらい、講義の中で写真に文章を付け加えてもらった。その後、出来上がった作品をグループで共有し、なぜこの写真を選んだか等についてディスカッションを行った。講義後に感想を書いてもらい、内容分析を実施した。内容分析は、1内容を1項目として含むセンテンスを記録単位とし、個々の記録単位を意味内容

の類似性に基づき分類する方法である²⁾。

【結果】

感想を書いた対象者のうち、研究の同意を得られた16名の回答を分析対象とした。内容分析の結果、56の記録単位が得られ、1次カテゴリは17項目となった。2次カテゴリでは「フォトボイスそのものの効果や難しさを実感する（記録単位数11：以下、数字のみ）」「自分の生活を振り返り、どのような作業で生活が成り立っているのかを考える機会となる（11）」「自分の生活の中の課題について考えるきっかけとなる（16）」「フォトボイスを通して他者とコミュニケーションを取ることが楽しい経験となる（18）」の4項目に集約された（表1）。

【考察】

学生は、フォトボイスを実施することでの効果や難しさ、楽しさを感じ、加えて自身の生活の中での作業について考えるきっかけとなっていた。西方³⁾は、作業・作業的存在を理解することを目的とした授業科目「作業科学」の紹介の中で、講義だけでなく、個人の振り返りやディスカッションなどの経験的学習が必要と述べている。今回行ったフォトボイスでは、自身の作業を写真に撮り、文章をつけ、ディスカッションをするという過程があり、作業について理解を深める機会になったと考える。そのため、この科目の目的である「人の生活と作業の理解」という点において、フォトボイスは有用である可能性がある。今後は、フォトボイスを行うことによって作業の理解がどう変化したかを分析していきたい。

【結語】

本校作業療法学生にフォトボイスを実施し、アンケート結果からどのような学びを得たのかを分析した。結果、フォトボイスそのものの楽しさ等を感じ取っただけでなく、自身の生活や作業についての振り返りを促すことが示された。フォトボイスは作業療法学生が人の生活と作業を理解する上で有用である可能性がある。

【文献】

1) 道信良子：ヘルス・エスノグラフィー子どもの

- フォトボイスを事例として、作業科学研究 6 (1), 15-19, 2012. 医学書院, pp40-79, 2007.
- 2) 舟島なをみ：第 2 章 III. 各研究方法論の特徴と成果 内容分析、質的研究への挑戦 第 2 版, 3) 西方浩一：学部教育における「作業科学」の紹介－作業・作業的存在の理解－、作業科学研究 15 (1), 44-51, 2021.

表 1. 内容分析の結果

1次カテゴリ	2次カテゴリ
写真だけではわからない想いを汲み取ることができる(2)	
写真に文章をつけることでその写真のイメージが変わることを実感する(3)	フォトボイスそのものの効果や難しさを実感する(11)
言葉に表すことの難しさを実感する(3)	
写真を見て思い出すが楽しい(3)	
写真に文章をつけることで生活の中の作業の大切さに気付く(2)	
生活の中でどのような作業があるのかを振り返る(2)	自分の生活を振り返り、どのような作業で生活が成り立っているのかを考える機会となる(11)
普段の日常生活の気持ちについて振り返る(2)	
大切な作業をすることに伴う代償があることを理解する(5)	
逃げていた自分の課題と直面することで、自分の課題が何かを再認識することができる(5)	
自分の課題にもプラスの側面があると理解する(2)	自分の生活の中の課題について考えるきっかけとなる(16)
課題に対してどう取り組むかを考えるきっかけとなる(2)	
課題に対する解決策が見つからないこともあることを認識する(7)	
他者の知らなかった一面を知ることが楽しい(5)	
他者の課題を知ることがおもしろい(3)	フォトボイスを通して他者とコミュニケーションを取ることが楽しい経験となる(18)
写真があることでコミュニケーションが促進されることを実感する(5)	
自分の経験や心情を共感してもらえ経験になる(1)	
他者とのディスカッションの中で解決策や新たな発見が生れる(4)	

【発表 6】

理学療法士，言語聴覚士からみる発達領域作業療法に望まれる技能

ー急性期病院における教育チェックリスト改訂のためのインタビュー調査ー

○川合 康夫（豊橋市民病院リハビリテーションセンター）

飯田 妙子（聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部）

Key words：臨床教育，教育目標，発達障害

【緒言】

当院は愛知県東三河地方の中核病院で，総合母子周産期医療センターを有し，リハビリテーションセンターではハイリスク児への早期リハビリテーションの導入，退院後の発達フォローアップを行っている。作業療法士（以下，OT）は，発達の遅れがみられる児や発達障害の可能性が疑われる児に対し，1歳前後～就学前を対象に外来作業療法を実施している。これまで後輩指導は行われてきたものの，教育目標や教育計画の設定，教育効果の判定は行っていない。そこで，令和5年度に，若手OTへの指導を通じて，教育スケジュールや教育チェックリストを作成，令和6年度には，作業療法教育ガイドライン，On-the-job training（以下，OJT）に基づいた先行研究等を参考に教育チェックリストの改訂を行ったが，これらは主観的な経験を中心に作成されており，設定された教育チェックリストの内容が必要十分であるかどうかの検証が必要と考えられる。

そのため，本研究では，当院の発達領域リハビリテーションにおいて，OTと緊密に連携を行う，理学療法士（以下，PT），言語聴覚士（以下，ST）の視点から，発達領域に関わるOTに必要な技能を明らかにすることで，発達領域作業療法における教育チェックリストを客観的で，より地域や医療職のニーズに沿ったものに改訂することを目的とした。

【方法】

対象

対象は，①当院に勤務していて，②発達領域のリハビリテーションに5年以上携わっており，③複数回の後輩指導経験を有しているPT，ST各1名とし

た。

インタビュー調査

インタビューを実施する上で視点の共有を図るため，発達領域作業療法の特徴・目的，ブルームの学習目標の3領域，OJTについて事前説明を行った。また，対象者が回答しやすいよう，作業療法教育ガイドライン2019，OJTの関連文献をもとに技能カテゴリーを作成した。インタビューでは，技能カテゴリーを参考に①発達領域に関わるOTに望まれる技能を抽出し，②他のリハビリテーション職種に共通する技能か，OT特有の技能であるかを選択してもらった。技能の抽出に当たっては，対象者が回答した技能に対し，必要に応じて質問を行い，技能の具体化・言語化を促した。抽出された技能はその場でカードに書き込み，対象者の意図する内容と相違ないことを確認した。

分析方法

データの分析は，対象ごとに抽出された技能を既存の教育チェックリストと比較し，①概ね一致・包含されている，②類似しているが，反映すべき内容がある，③追加が必要，④別カテゴリーと類似に分類し，①，②は必要な内容が反映されるよう技能の文言を修正，③は項目を追加，④は該当するカテゴリーへ統合や追加を行い，改訂版教育チェックリストを作成した。分析にあたっては，その厳密性を高めるため，OT養成校にて発達領域の科目を担当する作業療法教員2名（博士1名，修士1名）とともに実施した。

倫理的配慮

本研究は当院臨床研究審査会の審査対象外と判断されたため，対象者へ研究計画，目的，調査方法と内容，研究の利益と不利益，自由意志による同意の撤回，データ管理と個人情報保護，研究に協力しなくても不利益を生じないこと等，書面および口頭にて説明し同意を得て，十分な配慮の上で実施した。

【結果】

各技能の分析結果は表1の通りであった。教育チェックリスト改訂前後での技能数を表2，改訂版教育チェックリストを表3に示した。

表 1. 各技能分析結果

各技能の分析	対象PT	対象ST
①概ね一致・包含されている	16	14
②類似しているが、反映すべき内容がある	13	3
③追加が必要	17	10
④別カテゴリーと類似	3	2
総計	49	29

表 2. 改訂前後の技能数

カテゴリー名	改訂前	改訂後
コミュニケーション能力	2	3
情報収集・評価	8	16
治療・指導・環境設定	9	12
安全性の管理	2	4
記録・説明能力	3	7
多職種連携	3	4
課題解決能力	3	5
学ぶ姿勢・倫理観	2	8
総計	32	59

【考察】

改訂版チェックリストでは、「情報収集・評価」のカテゴリーでの追加が多く、医学的情報や効果判定などに関する技能が追加された。技能の内容を詳記した結果、複数の技能に分割されたものもあり、より幅広い範囲を網羅できたと考えられる。

技能カテゴリー別にみると、「情報収集・評価」と「治療・教育・環境設定」において OT 特有の技能が多く挙げられており、技能別においても、感覚や手指巧緻性に関する評価や、遊びや ADL に関する道具等の調整については、PT、ST とともに OT 特有の技能として挙げており、これらが多職種から求められる OT の技能であり、これらの技能カテゴリーにおいて OT の専門性が発揮できると考えられる。

【結語】

本研究では、技能の抽出を行ったが、それらの技能がどの程度優先的に習得されるべきか、習得する上での難しさについては検討できていない。教育スケジュールを構築する上では、習得の優先度や難易度を考慮し、基礎的な技能と応用的な技能に分類するなどの検討が必要であると考えられる。

表 3. 改訂版教育チェックリスト

技能 カテゴリー	技能	分類
コミュニケーション能力	対象児とコミュニケーションをとれる	共通
	養育者やその他の家族に共感したコミュニケーションをとることができる	共通
	遊びを通して、対象児との共作業を行うことができる ^{*1}	OT
	認知行動面の特徴について、観察から見立て、情報収集・評価ができる	OT
情報収集・評価	感覚機能について観察・情報収集し、評価できる	OT
	上肢機能、把持形態、巧緻性を観察・情報収集し、評価できる	OT
	身体機能、粗大運動、姿勢を観察・情報収集し、評価できる ^{*2}	共通
	遊びの様子を観察・情報収集し、評価できる	OT
	道具とその操作について評価できる ^{*1}	OT
	自転車、縄跳び、鉄棒などの特定のニーズについての評価が行える ^{*1}	OT
	子育てという視点を持って、養育者のニーズ、育児不安、負担感の評価ができる ^{*2}	OT
	自宅での生活状況(栄養、睡眠、生活スタイル、行動、道具の使用状況)、ADLの実行状況が聴取り情報収集できる ^{*2}	共通
	保育園など自宅以外の環境について情報収集できる ^{*2}	共通
	検査バッテリーを用いた評価を実施できる	共通
治療・指導・環境設定	行動特性から認知の特性を推察できる	OT
	リハビリフォローアップの必要性について判断することができる [*]	共通
	発達遅滞の原因など医学的情報を収集できる ^{*1}	共通
	効果判定を行うことができる(対象児、養育者の生活に対する満足度、セラピーに対する満足度) ^{*1}	共通
	問題点の抽出ができる ^{*1}	共通
	プログラムとしての遊びを実施できる	OT
	感覚や認知機能の特性に目的に合った遊びを選択・導入、指導ができる ^{*2}	OT
	日常生活動作の練習を実施できる	OT
	遊びや練習、目標設定の段階付けができる ^{*2}	共通
	自転車、縄跳び、鉄棒などの特定のニーズについての指導、訓練が行える ^{*1}	OT
安全性の管理	家庭で実施できる遊びやプログラムを指導できる	OT
	対象児に合った促し方、環境設定を生活場面を理解して指導できる ^{*2}	OT
	遊びやADLについて、対象児に合った道具、補助具の選択・提案できる	OT
	対象児に合った環境設定を実施できる(道具の調整を含む)	OT
	対象児の今後を(療育、就学、教育など)通して治療、指導が行える ^{*1}	共通
	指導内容を可視化できる(資料を作成することができる) ^{*1}	共通
	問題点を養育者と共有することができる(日常生活の中での関わり等に活かしていけるよう促す) ^{*1}	共通
	身体脆弱性を及ぼす医学的情報を把握できる ^{*1}	共通
	プログラム実施中のリスク(転倒、打撲、誤飲など)やライフス・テージや季節性のトラブルを把握している ^{*2}	共通
	リスクに合わせた管理(治療教材の管理を含む)ができる ^{*1}	共通
説明能力・記録	ホームプログラム実施時の安全性の管理について指導できる	共通
	介入時の特徴や変化点などを説明できる	共通
	対象児の行動特性・認知特性のつながりについて説明できる	OT
	作業療法実践の目的やプログラムについて説明できる ^{*2}	共通
	対象児の今後(療育、教育、専門機関)を見通して説明することができる ^{*1}	共通
	養育者や対象児にわかりやすく説明することができる ^{*1}	共通
	治療教材や道具についてのデメリットを理解し、説明することができる(メディア機器の使用による弊害など) ^{*1}	共通
	目的と実施内容の整合性を保ち、わかりやすく記録することができる ^{*1}	共通
	センター内の多職種(リハビリ医、PT、ST)と情報共有、相談、協議ができる	共通
	院内の多職種(小児科医、MSW、心理士)と情報共有、相談、協議ができる	共通
多職種連携	院外の多職種(他機関のリハ職種、保育士、保健師等)と情報共有、相談、協議ができる	共通
	多職種からの情報を取り入れ、すり合わせることで、治療や指導に活かしていくことができる ^{*1}	共通
	対象児への実践に関して、研修指導OTに確認、連絡、報告できる	共通
	発達領域OTにおける自己の課題を発見し、必要に応じてセンター内で相談をしながら、解決に臨むことができる	共通
	発達領域OTチーム内における課題を発見し、チームで解決に臨むことができる	共通
	文献や先輩から得た知識を対象児に適用することができる ^{*1}	共通
	新しい取り組みを計画・実行することができる ^{*1}	共通
	文献、資料を検索するなど、自ら進んで自己学習に取り組み、学ぶことを継続していくことができる	共通
	対象児や養育者、その背景を尊重して実践することができる	共通
	対象児、養育者の個人情報保護を適切に行うことができる ^{*1}	共通
学ぶ姿勢・倫理観	専門職としての倫理観を有している ^{*1}	共通
	虐待についての知識を持っている ^{*1}	共通
	障害受容の過程を理解している ^{*1}	共通
	祖父母世代・親世代・子ども世代の子育てに関する認識(時代背景含め)を踏まえて実践することができる ^{*1}	共通
	いくつかの発達理論を踏まえて実践することができる ^{*1}	共通

^{*1}…新たに追加された技能 ^{*2}…修正を加えた技能

【発表 7】

MTDLPを実習指導で作業療法教育ツールとして活用するための要因

○小林 幸治（目白大学）

水島眞由美（横浜リハビリテーション専門学校）

竹田 和也（社会医療法人緑社会金田病院）

Key words：作業療法参加型臨床実習，生活行為向上マネジメント（MTDLP），実習指導スキル

【はじめに】

作業療法の目標は日々の生活の諸活動に人々が参加できるようにする事であり（WFOT, 2012）、人々にとって目的や価値を持つ生活行為をその対象（日本作業療法士協会, 以下, OT 協会, 2018）としている。わが国の地域包括ケアシステムの推進の中で開発された生活行為向上マネジメント（以下, MTDLP）はそうした作業療法の核となる考え方を示した実践モデルであり、5か年戦略において推進の重要な鍵を握るのは養成教育だとされてきた。

OT 協会は、養成教育における MTDLP の教授を推進するため、2015 年度に全国教員研修会を開催し、同年度卒業生から全国養成学校で MTDLP に関する講義と演習の実施を推奨した。2018 年度より厚生労働省指定臨床実習指導者講習会が開始されたが、OT 協会版講習会には臨床実習指導方法論として MTDLP を活用した作業療法参加型臨床実習（以下, MTDLP 臨床実習）の講義と演習が 2.5 時間盛り込まれた。作業療法参加型臨床実習は対象者の生活行為に焦点を当てた実践についてクリニカル・クラクシップ（以下, CCS）の臨床教育方法で実習指導を行う臨床実習である。また、2020 年度より MTDLP 推進協力校・強化校認定制度が本施行され、現在 29 校 31 課程である。2019 年度調査では全国養成学校 70 校中 21% が MTDLP 臨床実習を推進しているが、実習指導できる臨床教育者（以下, CE）が少ない、シート記入の実習になりやすい等の課題が挙げられた（筆者ら）。

そこで、OT 協会養成教育課では MTDLP 臨床実習ガイド（2022）、MTDLP 臨床実習実例集（2023）（以下, 実例集）を編纂した。本実習実例集は、MTDLP 推進協力校・強化校の教員とその実習施設

の CE に依頼し、身体・精神科・小児期・高齢期 4 領域における 20 の臨床実習実例を編者のチェックや修正を経て収集した。

【目的】

MTDLP 臨床実習の指導を行うために必要な要因を、実習環境、教育的効果、模倣させた内容、指導方法等について明らかにする。

【方法】

実例集に掲載された 20 実例について、対象者、必要とした準備、実習環境、教育的効果、実習指導の工夫、作業療法教育における意義、標的にした生活行為、学生が模倣で行った実習内容、設定された学習課題、実習指導方法の各項目の情報を抽出しアブストラクトテーブルを作成した。そこから、MTDLP 臨床実習の指導を行うために必要な要因と判断した代表的な内容を項目毎に集約し、考察した。以上を著者と共著者 2 名で協議して行った。本研究実施にあたり、OT 協会の承認を得た。

【結果】

実習の対象者は、CE が過去の生活状況や役割を聴取、疎通性がよく目標が明確、長期入所だが楽しさや生活の刺激を提供したい等、MTDLP に関わるメリットが意識されていた。実習環境は、CE が MTDLP 実践経験を持つ、対象者への説明と同意、他職種や家族と学生が関わる機会を提供することがあった。MTDLP 臨床実習指導の重点、実習指導の工夫、学生に模倣させる内容、CCS に基づく指導方法は表に示す。MTDLP 臨床実習指導の重点は、生活行為向上支援の思考過程を理解すること等に重きが置かれていた。実習指導の工夫は、標的とする生活行為と環境の影響が捉えやすいよう工夫がされていた。学生の模倣内容は、応用的プログラム等の他、聞き取りや他職種との情報共有が含まれていた。CCS に基づく指導方法は指導環境づくり、段階的な実践経験、CE と共に振り返る等が行われていた。教育的効果は、対象者特性に沿った目標立案、シートで支援内容を整理、経過の中で対象者の反応を解釈し配慮などに活かす等が達成されていた。

【考察】

対象事例では、CE が MTDLP の考え方を日頃から実践し、学生に伝えるべき要点を理解し、かつ

CCS に基づいた指導が行われていた。今回得られた指導の要因を CE に対する MTDLP 臨床実習の指導スキル向上に役立てることが重要だと考える。

表：MTDLP 臨床実習の指導のための要因

MTDLP 臨床実習 としての 指導の重点	・生活行為向上支援の思考過程を理解する ・MTDLP のプロセスを経験させる ・見学／模倣／実施の流れの中で MTDLP シートを使って臨床思考過程を学ぶ ・生活行為の分析から課題や働きかけ方などを学ぶ ・デイ以外の生活状況を考えたかわり ・福祉的就労を目指す流れを CE 助手として経験 ・対象者の人生物語を捉えさせる ・MTDLP の型よりも考え方を使った見方を知る
実習指導の 工夫	・病棟 ADL を学生と看護師に相談 ・実際の調理で指導する注意事項を学生と検討 ・自宅環境の情報収集を基に応用的練習を行う ・認知機能障害が ADL に及ぼす影響を検討させる ・アセスメントシートで項目間の関連を線でつないで考える方法 ・合意目標を複数回の面接で十分に検討することを伝える ・予後予測や優先度を学生と一緒に整理する ・スタッフの作成シートを見せる ・就労を目指す上での課題を対象者、CE、学生で話し合う ・訪問リハに引き継ぐ内容を学生と検討する
学生に 模倣させる 内容	・生活行為の聞き取り（CE 同席） ・応用的プログラムの作成と実践（模擬的な生活行為訓練、物品運搬訓練など） ・動機づけの声かけ ・外出のための屋外環境の実地調査 ・病棟職員との情報共有
CCS に 基づく 指導方法	・何でも質問できる安心できる環境づくり ・見学の際に治療のヒントや思考過程が得られるよう配慮 ・MTDLP シートでの課題整理を CE と一緒に行う ・見学／模倣／実施で実践経験を重ねる ・介入効果を CE と一緒に振り返る ・CE のプログラム作成の思考を伝える ・CE の助手として一連の流れを経験させる

【発表 8】

福岡県における作業療法の認知度およびイメージ調査

○太田 研吾（公益社団法人福岡県作業療法協会
福岡県作業療法士養成教育協議会
作業療法啓発ワーキンググループ）

青山 克実（公益社団法人福岡県作業療法協会
福岡県作業療法士養成教育協議会
作業療法啓発ワーキンググループ）

石原 浩二（公益社団法人福岡県作業療法協会
福岡県作業療法士養成教育協議会
作業療法啓発ワーキンググループ）

大内田由美（公益社団法人福岡県作業療法協会
福岡県作業療法士養成教育協議会
作業療法啓発ワーキンググループ）

永田 敬生（公益社団法人福岡県作業療法協会
福岡県作業療法士養成教育協議会
作業療法啓発ワーキンググループ）

丹羽 敦（公益社団法人福岡県作業療法協会
福岡県作業療法士養成教育協議会
作業療法啓発ワーキンググループ）

野村 和代（公益社団法人福岡県作業療法協会
福岡県作業療法士養成教育協議会
作業療法啓発ワーキンググループ）

Key words：作業療法，啓発活動，アンケート

【緒言】

日本作業療法士協会は第四次作業療法5ヵ年戦略で「作業療法士になりたい人」を増やすことを目的とした作業療法の普及・啓発及び養成施設との連携強化を掲げている¹⁾ことから、作業療法を一般市民の方々へ広く普及・啓発していくことは重要な課題である。

そこで、福岡県作業療法協会が運営する福岡県作業療法士養成教育協議会では、2022年より「作業療法士が職業選択の1つとなる」ための方策を検討することを目的とした作業療法啓発ワーキンググループを発足した。今回、効果的な啓発活動を模索するために、作業療法の認知度およびイメージについてアンケート調査を実施した。

【方法】

1. 対象

対象は福岡県作業療法協会に所属する協会員（以下 OTR）、福岡県内のリハビリテーション養成校学生、福岡県内の中学生、高校生、保護者、中学高校教師である。

2. 方法

リハビリテーション関連職種及び作業療法に関する認知度、イメージについて18項目のアンケートを実施した。アンケートはそれぞれの質問項目に沿った選択形式とした。調査の趣旨を説明した用紙をリハビリテーション養成校、中学校、高校、OTR所属機関へ郵送にて配布し、アンケートに同意が得られたもののみ、無記名にてWebアンケートによる調査を行った。次に、アンケート結果を参考にワーキンググループにて、SWOT分析を用いて、作業療法の現状についての整理、効果的な啓発活動の検討を行った。SWOT分析は、企業において、自社の経営課題の整理・明確化や戦略・施策の企画検討など多く活用されている。企業の内部環境における「強み = Strength」, 「弱み = Weakness」, 外部環境における「機会 = Opportunity」, 「脅威 = Weakness」の4つの観点からディスカッションを通して整理し、目標達成に向けて活用されるブランディング手法である²⁾。

調査期間は、2023年4月1日から9月30日までとした。なお本研究は、福岡県作業療法協会理事会の承認を得て実施した。

【結果】

1. 対象者の特性

OTR 149名、リハビリテーション養成校15校1,945名（作業療法学科学生598名、理学療法学科学生1,171名、言語聴覚学科学生176名）、中学校12校1,430名、高校20校2,641名、保護者701名、中学高校教師168名の計7,034名の回答を得た。

2. 結果

①リハビリテーションに関する認知度

リハビリテーションに関する認知度についての質問では、「知っている」が全体で96.3%であった。また、リハビリテーションを知った時期についての質問では、中学生、高校生は「小学生で知った」という回

答が多い結果となった。

②リハ関連職種の認知度

作業療法士（以下 OT）、理学療法士（以下 PT）、言語聴覚士（以下 ST）のリハ関連職種の認知度についての質問では、中学生では PT との差は大きくないが、高校 2 年生になると 20% 以上の差が見られた（図 1）。

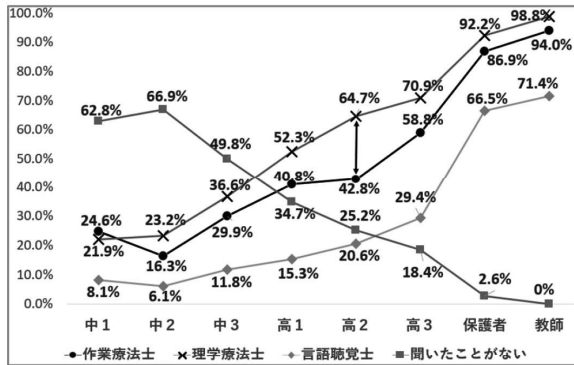


図 1 リハ関連職種の認知度

③作業療法の認知度・魅力

OT のイメージについての質問では、「大変そう」が 42.9%、「難しそう」が 36.1% の順に多く、反対に「就職しやすい」は 2.8%、「楽しそう」が 5.2% と少ない回答となった。

OT の仕事内容についての質問では、「身体の機能を回復する」が 52.8%、「1 つも知らない」が 41.2%。OT の仕事内容の魅力についての質問では、中学生、高校生、保護者、教師は「身体の機能を回復するためのリハビリ」が 42.9%、「患者さんの生きがいを支援する」が 33.1%、「心の機能（精神機能）を回復するためのリハビリ」が 28.9% であった。

④進路選択の理由

現在の学科（職業）を選択した理由についての質問では、「家族や知人に聞いた」が OTR では

39.6%、OT 学生 38.7% と最も多く、PT 学生は「自分がリハビリを受けた」が 53.2% と最も多い結果であった。また、職業選択の理由に関する質問では、「業務内容を調べたうえで自分に合っていると感じた」が OTR で 28.9%、OT 学生で 30.0%、PT 学生で 13.7% であった。職業選択を決めた時期としては、OT 学生は他学科と比較し「高校 3 年生」で決定するものが最も多く、PT 学生は他学科に比べ「高校 2 年生」で進路を決定するものが多い傾向であった。

【考察】

SWOT 分析の結果、作業療法の内部環境としての弱み（Weakness）は、作業療法の専門性や仕事内容が認知されていないことや OT に対してポジティブなイメージがないこと、PT に比べ進路選択までに時間がかかっていることが挙げられた。作業療法の外部環境としての機会（Opportunity）としては、リハビリテーションという用語は小学生からも認知されていること、OT は保護者や教員の認知度は高いこと、中学生では、PT・OT の認知度に差は少ないこと、「対象者の生きがいを支援する」ことに魅力を感じていることが挙げられた。

今後は、高校生からでなく、小・中学生からの啓発を通し、早い段階から少しでも多くの方々が OT に直接触れる機会を作り、「楽しさ」や「生きがいを支援」など魅力を感じるものを知ってもらうことが必要ではないだろうか。

【文献】

- 1) 第四次作業療法 5 ヶ年戦略（2023-2027）地域共生社会 5 ヶ年戦略・組織力強化 5 ヶ年戦略。日本作業療法士協会誌。第 131 号 2 月。2023。
- 2) 大工舎宏：SWOT 分析による企業実態調査の実践。銀行営業推進：100-106。2011。

【発表 9】

アート教育を取り入れた授業に対する学生の認識調査

○大橋 航祐（東京福祉専門学校作業療法士科）

渡辺 陵介（東京福祉専門学校作業療法士科）

Key words：作業療法教育，アート教育，学習意欲

【緒言】

作業療法養成課程において医学系科目に苦手意識を持ち、意欲が低下してしまう学生が散見される。北村ら¹⁾は医療系大学における中途退学者の多くが学業不振であると述べており、本校においても作業療法士を目指すも勉強についていけずに挫折する学生は少なくない。そこで本校では学生が苦手意識を持ちやすい医学系科目の一つである整形外科において、科目に興味を持ち学習を楽しんで行えるようアート教育を取り入れている。

アート教育については近年STEAM教育が注目されているが、それ以前に1999年からアーツ・インテグレーション教育という美術などの芸術形式を通して、他の教育分野の理解を深める教育方法が推進されている²⁾。こうしたアートを他教科の授業に取り入れたことで学力低位の学生も含めて学習態度の変化が生じたと報告されている³⁾。

本研究ではアート教育導入の利点と課題を明らかにすることを目的とする。なお、所属機関の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

【方法】

はじめに、アート教育の概要について述べる。導入の目的としてはアート表現を通じて学習意欲及び学習理解の向上を図ることである。整形外科（科目担当教員は研究責任者が行っている）の授業各回にて講義内容を振り返る15分程度の描画時間を設けている。内容は講義で印象に残ったものを表現する。講義内容の表現が難しい場合には、制限なく今描きたいものを表現するよう促している。画材はA3スケッチブック、オイルパステル等を使用。学生には毎回描画とともに制作意図を記載させ、担当教員は授業後に各学生の描画及び制作意図に対しフィードバックコメントを記載した。

本研究の対象者は作業療法士科昼間部第2学年学

生。全授業終了後にアート教育に対する振り返りアンケートを5件法及び記述にて実施した。内容は描画を取り入れたことによる意欲や理解に変化が生じたかどうかに加え、アート教育の取り組みに対する感想、教員からのフィードバックコメントに対する感想については記述回答を求めた。なお、アンケートは匿名性を保って実施した。アンケート結果及び描画に記した制作意図を分析対象とする。

【結果】

研究の同意が得られたのは15/16人であった。授業に描画を取り入れたことにより、勉強に対する意欲が湧いたと感じるかどうかに対してとてもそう思う、そう思うが74%。勉強の理解が深まったと感じるかどうかに対してとてもそう思う、そう思うが60%の回答となった（表1）。記述を求めたアート教育の取り組みについては、絵を描くことが楽しかったという意見が多く得られた。理解というキーワードを用いた記述回答は1名、また、絵が苦手で少し苦痛だったなど否定的な意見も聞かれた（表2）。教員からのフィードバックコメントに対しては嬉しい、楽しみといった肯定的意見が得られ、否定的意見は得られなかった（表3）。制作意図には学習内容の他、最近の出来事、相談ごとなどの内容が記載されていた。

【考察】

勉強に対する意欲が湧いたかについては74%が肯定的な回答を示した。岸田ら⁴⁾は描画による感覚器官に対する刺激や制作に伴う楽しさや達成感が生活の質を高めると述べている。記述回答では授業が楽しみになったなどの感想が得られ、学生にとって授業という生活の一部に楽しみがつけられたことが学習意欲の向上の結果につながったと考える。理解の深まりについては60%の肯定的な回答が得られたが、記述回答で理解というキーワードを用いた回答は1名のみで、学生の認識としても十分な効果は得られなかったと感じる。制作意図については、当初想定していたよりも学生から様々な記載が得られ、交換日記のような形式を取るようになった。ガードナー⁵⁾は、人間には多様な知能が存在すると指摘し、そうした異なる性質を持った学生に対して“個

人ごとに設計された教育”を提唱した。その際の重要な点として、個々の生徒の心、人となりを知ることとしている。制作意図を通じて学生の状態を適宜把握するとともに、学生の人となりを深く知るきっかけが得られた。この関わりが学生一人一人に合ったフィードバックとなったことも、学習意欲やモチベーション向上に繋がった要因と考える。絵を描くことが苦手、負担に感じてしまう学生については、授業開始時に絵の技術を求めるものではないとアートセラピーの視点で話をするなど配慮を行ったが、紙の大きさや表現の自由度という点で負担をかけてしまったと考える。

【結語】

授業にアート教育を取り入れる利点として、描画表現が学習に楽しさを与えるツールとなるだけでなく、描画表現から学生を知り、個々に合わせた対応や関係を築くために役立つ体験が得られた。一方で描画表現に負担を感じる学生がいる事実に対して、配慮の必要性については課題が残る。

【文献】

- 1) 北村拓也, 木村和樹, 阿志賀大和, 他: 医療系大学における中途退学要因及び対応策の提案, 新潟リハビリテーション大学紀要 8 (1), 43-52, 2019.
- 2) 上野行一: Art (美術) の役割や位置付けを明確にした STEAM 教育の在り方, 美術による学び, 日本・美術による学び学会誌第 1 号, 1-18, 2020.
- 3) 福本謹一: 芸術教育における統合をめぐるーアメリカの芸術による学祭的アプローチの事例と課題ー, 兵庫教育大学研究紀要第 2 分冊, 75-87, 1983.
- 4) 岸田由佳, 大谷正人: 特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性, 三重大学教育学部研究紀要第 61 巻, 219-249, 2010.
- 5) ハワード・ガードナー 著, 松村暢隆 訳: MI: 個性を生かす多重知能の理論, 新曜社, 216-217, 2001.

表 1 アンケート回答 (5 件法)

	授業に描画を取り入れたことにより勉強に対する意欲が湧いたと感じる	授業に描画を取り入れたことにより勉強に対する理解が深まったと感じる
とてもそう思う	27%	13%
そう思う	47%	47%
どちらでもない	6%	27%
そう思わない	20%	13%
全くそう思わない	0%	0%

表 2 アート教育の取り組みに対する感想

キーワード	感想
楽しい	新鮮で楽しかったです/いつの間にか授業の1つの楽しみになっていた/気がほぐれるしとても楽しかった等
理解	自分のイメージを絵にすることによって理解が深まった気がする。その日の授業を自分なりに噛み砕いて出力することが求められるのでいい取り組みだったと思います等
面白い	この授業でクレヨンの面白さを初めて学びました。今では自分でクレヨン買って家で書く日もあります。とてもリフレッシュになって憂鬱な金曜日にもこの授業があったから登校できました等
その他	慣れないことへの挑戦な感じ/素晴らしい体験/自分だけの世界に入り込める作業/至福
苦手	絵を描くのが苦手だったから少し苦痛だった
難しい	絵での自己表現は難しいと感じた
負担	スケッチブックだと圧迫感を感じてしまい、少し負担でした

表 3 教員からのフィードバックコメントに対する感想

キーワード	感想
嬉しい	先生はとても一人一人を見てくれている気がするし、コメントもちゃんと読んで受け取ってくれて嬉しかった/自分の書いた絵やコメントに対して、フィードバックをしっかりとくれることはすごくうれしい/単純に褒めてもらえることは嬉しかった等
楽しい	いつもなんのコメントが書いてあるか楽しみにしているのですがたくさんコメント書いてもらって読むのがワクワクしました!/とても楽しかった。授業の内容以外にもいろんな趣味の話など1枚1枚で交換日記してる感覚で面白かったし楽しかった等
モチベーション	なんの絵を書いてくれたのかを理解してくれたりして1つ1つコメント書いてくれたのは絵を描く意味でもモチベーションの向上に繋がるなと思った/先生からのフィードバックがめちゃくちゃポジティブになれるような返しをくれるので授業のモチベーションが上がりました/アドバイスをもらったりするとやる気が出ました等

【発表 10】

MTDLPに基づく臨床実習の学修効果

～MAXQDAを用いた質的分析～

○青山 克実（九州栄養福祉大学リハビリテーション学部作業療法学科）

Key words：MTDLP，臨床実習，学修効果

【はじめに】

2018年の理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則改定を受けて，日本作業療法士協会は臨床実習指導ガイドラインの中で，臨床実習の形態は「診療参加型」が望ましく，「生活行為向上マネジメント（Management Tool for Dairy Life Performance，以下，MTDLP）を活用することを推奨している．本研究の目的は，本学作業療法学科で導入を試みてきた，MTDLPに基づく臨床実習の学修効果について検証することである．

【方法】

1. 対象

A 大学作業療法学科に所属し MTDLP に基づく臨床実習を経験した学生5名とした．

2. 方法

（1）データ収集

対象者にインタビューガイドを用いて，半構造化面接を実施した．インタビューは同意を得た上でICレコーダーに録音した．

〈インタビューガイド〉

MTDLPに基づく臨床実習を通して，

■うまくできるようになったと感じること

■作業療法のとらえ方に変化

■役に立った知識や実習までに学びたいこと

■メリットや課題

（2）データ分析

①インタビューで録音されたデータは，質的データ分析ソフト MAXQDA（VERBI 社）を用いてコーディング，カテゴリー化し，質問項目ごとに概念化した．

②概念化した内容については，対象者に開示し，合意の程度についてメンバーチェックを実施した．合意の程度について1点（まったく同意できない）～10点（とても同意できる）の10件法にて

回答を求めた．6点未満の場合は，コメントを求め修正することとした．

3. 倫理的配慮

本研究は，筆頭筆者所属機関の倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：2404号）．研究対象者には本研究の主旨等について口頭と書面にて説明し，書面にて同意を得た．

【結果】

1. 対象者とインタビューの実施について

研究対象となった学生は，5名全員が研究への協力に同意した．各対象者のインタビュー実施時間は，19分43秒～30分57秒であった．

2. MTDLPの学修効果に関するインタビューの分析結果

（1）MTDLPに基づく臨床実習でうまくできたこと，うまくできるようになったと感じたこと

カテゴリー	サブカテゴリー
MTDLPの使いやすさ	・MTDLPの使いやすさ ・MTDLPの難しさ
MTDLP以外の実習での経験	・ボトムアップ思考の難しさ ・機能訓練中心になりがちなプログラム ・できないこと中心の評価
MTDLPによる学修効果について	・多職種連携を図ることができた ・トップダウンの思考に沿って展開できた ・多様な評価を組み立てることができた ・合意した目標を設定できた ・プログラムを設定できた ・成果につながった

（2）役に立った知識や経験と実習前に学びたいこと

カテゴリー	サブカテゴリー
役に立った知識や体験	・学んだ科目 ・医学的基礎知識 ・評価学関連の知識 ・基礎作業学関連の知識 ・実習中に経験した演習
実習での気づき	・作業を通じた気づき ・対人交流技能への気づき ・MTDLPの難しさ
実習前に学びたい知識やスキル	・MTDLP関連の知識 ・疾患別リハの内容 ・面接スキル ・目標設定の仕方

(3) 作業療法に対する捉え方の変化や気づき

カテゴリー	サブカテゴリー
多職種連携に対する気づき	・多職種連携が理解できた ・OTの専門性を意識できた
OTへの再認識と変化	・クライアント中心であること ・多様な介入内容 ・社会資源を活用すること
以前の考えと反省	・職業アイデンティティが曖昧だった ・セラピスト中心になりやすい

(4) MTDLPに基づく臨床実習のメリットと課題

カテゴリー	サブカテゴリー
MTDLPに基づく臨床実習のメリット	・臨床思考過程の学びやすさ ・使いやすさ ・シートの活用しやすさ ・多職種連携のしやすさ ・成果へのつながりやすさ
学内での課題	・課題となる取り組み ・MTDLPに触れる機会の少なさ
MTDLPの課題	・聞き取りの難しさ ・工程の長さ ・多職種が理解していること
MTDLP以外の実習での経験	・ICFの難しさ ・ボトムアップの思考プロセス ・聞き取りの難しさ

3. 分析結果のメンバーチェックについて

全ての質問項目で平均 8.6 点以上であった。

【考察】

本研究におけるメンバーチェックの結果から、一定の妥当性は確保できたと考える。

MTDLPを用いることで、作業に焦点を当てたトップダウンの思考プロセスに沿って OT を展開できるようになり、目標の合意やプログラムの立案・実施につなげることができるようになったという実感が

得やすい点が学修効果であり、メリットとして考えられた。また、MTDLP のシートを利用することで、学生という立場でも他職種に説明しやすく、多職種連携プログラムが実施できたという点も注目すべき学修効果、メリットであると考えた。

OT の専門性は、機能訓練だけでなく、クライアントの思いやその人らしい生活行為（作業）を支援することである、という職業的アイデンティティの発達や他職種の専門性への理解にも寄与すると考えられた。

役に立った知識や経験については、基礎作業療法学や作業療法評価学等での、作業の経験や演習、人と作業の多面的な側面に関する知識があげられた。また、ICF や動作分析の演習、事例を通した臨床推論の演習、目標設定に関する視点が役立てられていた。今後は、作業科学や作業療法理論を通したクライアントの多面的側面の理解と臨床推論を充実させていくことで、MTDLP に基づく臨床実習の学修効果をさらに高めることができると考えた。また、学生は「生活行為の聞き取り」に難しさを感じており、人の生活や作業の聞き取り方や見方を繰り返し経験していくことが、MTDLP の効果的な活用につながるのではないだろうか。学生は、MTDLP に触れる機会の少なさも指摘しており、多科目で MTDLP の実践例を示し、臨床思考過程を学ぶ機会が重要であると考えた。

【謝辞】

本研究に協力頂いた学生、および熱心に指導頂いた臨床実習指導者の皆様に、心より感謝申し上げます。

【発表 11】

地域臨床実習における当院通所リハの取り組み

〇都甲 哲生（健和会戸畑けんわ病院）

Key words：地域実習，臨床思考過程，意見交換

【はじめに】

当院通所リハビリテーション（以下通所リハ）では、以前より地域臨床実習（以下地域実習）の受け入れを行ってきた。短い地域実習期間の中で、地域における作業療法士（以下OT）の役割や臨床思考過程について経験（見学）を通し学んでもらいたいと思い、当通所リハでの効果的な地域実習について、スケジュールや方法の検討を行った。今回その具体的な取り組みについて述べる。

【方法】

依頼される地域実習の期間は、1週間が一般的で、主に1年次もしくは2年次の学生を同時期に1養成校から複数名受け入れている。1週間という短い期間のため、実習目的は、学生に地域作業療法を体験、体感してもらう、それにより、OTの臨床思考過程を少しでも経験、理解してもらうこととした。具体的には以下2つの取り組みを行った。

- ①当事業所が大切にしていること、地域の中で何が大切かを知ってもらうため、利用者の個別リハサービスの直接領域のみならず、カンファレンス、サービス担当者会議、リハ会議、家庭訪問などの間接領域の経験も提供するスケジュールを立案した。その中で、1年次は利用者、職員とのコミュニケーションを図ることを獲得課題とし、2年次は、1年次の課題に加え、利用者の地域生活がわかることを獲得課題とした。
- ②学生同士で、直接領域、間接領域の体験、体感から、何を思ったか、感じたか、どのような疑問を持ったかについて、また、指導者側が提示するテーマについて、学生同士で意見交換する機会を毎日、30～60分程度設けた。

【結果】

①の取り組みにおいて、教育者は、自事業所の日常的な活動を学生に伝えることで、自身の業務の意味づけや思考整理、業務の改善につながった。学生

からは、リハ会議参加後、「個別リハだけがOTの業務内容ではない、多職種と協力する重要性がわかった」という趣旨の発言があった。また獲得課題を明確化させたことで、教育者からは、「学生と課題到達状況の共有が行いやすくなった」との意見があった。②の取り組みにおいては、学生同士で意見交換することで、その日学んだことを共有し、互いに気づかなかった疑問を見つけ、その疑問に対し、お互いで学び合う姿が見られた。

【考察】

本取り組みにより、学生に地域で働くOTの役割と多様な業務内容を理解し、OTの業務が直接領域だけにとどまらず、多職種との関わりの中で利用者の地域生活が育まれていると感じられたようであった。OTの臨床思考過程については、知識、経験不足もあり、十分伝わらない面もあったと感じる。しかし、②において、学生同士で意見交換する機会を得ることは、主体的な学びや相互の学びにつながり、学習効果が高いと感じられた。また、学生同士の意見交換の時間を設けたことで、教育者の指導負担の軽減、学生の心的ストレス軽減も図れたと思われる。

【結語】

短期間の地域実習において、地域におけるOTの役割や臨床思考過程の経験（見学）に重点を置いた取り組みは、学生の地域作業療法への理解を深めることができたと考える。地域実習を臨床参加型実習（見学、模倣、実施）に当てはめて考えると、1年次、2年次である学生では、見学の要素が多いと考える。見学レベルで、いかに地域作業療法を伝えていくか、イメージを持ってもらうかは、以降行われる評価実習、総合実習に少なからず影響を与えるものであるとも考える。

今後の課題としては、当事業所の取り組みの効果検証が重要である。地域作業療法で何が学べるか、地域実習用のチェックリストを用い、地域実習で経験、体感した項目と、その量、習得状況を可視化していくことも検討したい。また、学生の習熟度調査や学生、養成校からのフィードバックを得ることで、より効果的な地域実習プログラムの構築につながると考えられる。

【発表 12】

多世代・地域交流プロジェクトにおける高校生と
作業療法士の協業

ー 認知症にやさしい図書館活動を通してー

○谷川 良博（令和健康科学大学リハビリテー
ション学部作業療法学科）

山根 伸吾（令和健康科学大学リハビリテー
ション学部作業療法学科）

永井 邦明（令和健康科学大学リハビリテー
ション学部作業療法学科）

角田 孝行（令和健康科学大学リハビリテー
ション学部作業療法学科）

青山 克実（九州栄養福祉大学リハビリテー
ション学部作業療法学科）

Key words：図書館，認知症，交流

【はじめに】

我々は、多世代の人々が図書館に集い、地域交流を目標にして 2022 年から政令指定都市 A 市の公立図書館 1 館で、「認知症にやさしい図書館」活動（以下、活動）を図書館職員と行政関係者（以下、関係者）と、市民ボランティア、学生（高校生・大学生）ボランティアで開始した。以後、毎年 1 館ずつ協力図書館が増え、2023 年には 2 館で実施した。2024 年は 3 館で実施する予定である。この活動には、ボランティア（市民、高校生、大学生、作業療法士）の協力が不可欠である。高校生と作業療法士との協働も進んでいる。特に、市民や認知症の当事者には、若い世代との交流は大きな魅力となり、参加動機につながっている。

多世代の人々を巻き込んだ地域交流を具体的に構築する時期にきており、そのヒントを得るため一般参加の市民と高校生ボランティアにアンケートを実施した。なかでも、高校生の作業療法に対する理解が進んだことがわかり、本活動の継続が作業療法の啓発につながることもわかったので報告する。

【取り組みまでの背景】

令和元年 6 月に認知症施策推進大綱によって、認知症の人本人からの発信が重要とされ、そのうえでの普及啓発が推進されるようになった。同時に、啓発や認知症の人の居場所に図書館が明記された。令

和 6 年 1 月から施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」によって、共生社会と国民の認知症に関する正しい理解の促進が謳われた。このような制度の流れのなか、図書館は、地域貢献の方法と連携に解決手段をもっていなかった。我々は A 市内図書館 1 館に本活動を提案した。

【取り組みの目標と内容】

目標は段階的に進めるようにした（表 1）。

表 1 認知症にやさしい図書館の目標

目標	内容
1	図書館所蔵の図書を中心に、認知症の人や介護家族、市民が求める図書とつなげる
2	多世代の市民に認知症の正しい理解を促す
3	図書館が認知症の人や介護家族にとって交流の場、社会参加の場となる

表 2 認知症にやさしい図書館の活動内容

	内容
1	認知症関連の書籍展示
2	認知症を啓発する市民講座
3	認知症ブックカフェ

2023 年の活動は、図書館 2 館で、それぞれ 9 月 10 日と、10 月 8 日に開催した。活動内容は共通で、表 2 に示す。表 2-1 は世界アルツハイマー月間を含めて 3 ヶ月間展示した。表 2-2 は作業療法士が認知症について、図書館の蔵書を紹介しながら講義を行った。2023 年は、我々が作成した認知症関連図書の紹介冊子をもとに講座を開催した。表 2-3 の認知症ブックカフェ（以下、ブックカフェ）はいわゆる認知症カフェである。市民講座の後、希望者に残ってもらう形式で実施した。

【学生ボランティアの実践内容】

学生ボランティアは、以下の方法で募集している。高校生は、図書館近隣の高校内に募集ポスターを掲示して公募している。大学生は、図書館近隣の大学

(一般公立大学, リハ学部がある大学)の教員から募集してもらっている。

高校生ボランティアの内容は、認知症の本の内容を紹介するポップ作成, ブックカフェで本の紹介(発表), 絵本の朗読, 図書展示コーナー作成である。これらの一連の活動に取り組む前に、事前講習会を開催し、作業療法士は認知症に関するレクチャーと選書のヒント提示を担当している。ブックカフェは、市民、市民ボランティア、高校生、大学生(作業療法学生と一般大学生の混合)、作業療法士を8名程度のグループに編成して、談話を中心に実施している。

【倫理的配慮】

本報告について関係者と各ボランティアから承認を得た。アンケートは、対象者に調査の目的を書面と口頭で説明し、個人が特定できない旨を伝えた。アンケートには承諾するチェック欄を設け、欄へのチェックとアンケートへの回答をもって承諾とした。

【アンケート】

アンケートは2023年10月8日のイベント終了後に実施した。対象は、①市民講座と認知症ブックカフェの両方に参加した市民46名、②今回が初参加の高校生ボランティア16名とした。市民には、過去の参加状況を尋ねていない。質問内容は市民と高校生ボランティア共通で、活動に参加した感想(例示で3件:楽しかった、役に立った、また来たい、その他の感想は自由記載欄を設けた)で、択一方式とした。

【結果】

市民の回答件数は42件(回答率91.3%)、平均年齢は60.3歳であった。活動に参加した感想には、「楽しかった」20件(47.6%)、「また来たい」12件(28.6%)、

「役に立った」5件(11.9%)であった。自由記載は5件(11.9%)あり、「新しい取り組みでこれからは楽しみとなった」、「知的な雰囲気を保ってもらえた」、「若い人との交流は楽しかった」、「絵本の朗読から力をもらえた」、「地元の高校生が協力していることが嬉しい」であった。

高校生ボランティアの回答は14件(回答率87.5%)、平均年齢16.4歳であった。活動の感想は、「楽しかった」6件(42.9%)、「また来たい」3件(21.4%)であった。自由記載は5件(35.7%)あり、「やりがいを感じた」、「作業療法士はこのような仕事もすることがわかった」、「作業療法士の発言を皆が納得していた」、「高齢者と話すのが初めて」、「人の役に立った感覚を得られた」であった。

【考察】

これまでの認知症関連の取り組みは、認知症の人や介護家族に対する教育的な側面が多かった。この活動は市民にとって身近な公共施設を活用して、一般市民や若い世代を巻き込むピアサポートや、活動を通してボランティアの育成など、共生社会を進める手段となり得ると考えている。アンケートから、参加者は交流によって多くのことを学んでいる様子が見えてきた。さらに、図書館での開催は知的好奇心をくすぐり、ピアサポートを促進するには図書館特有の雰囲気が有効なことがわかった。この活動は関係者間の目標共有、具体的な企画の検討、役割分担など協働は多岐にわたる。そこで、高校生にも参画を促し、作業療法士との協業経験のプロセスが職業理解を促進できると考えられた。

【結語】

社会課題の解決に向けて作業療法士が多世代と連携することは重要であり、中学生や小学生に、その輪を広げていく予定である。

【発表 13】

作業療法士養成課程における「地域実習」の取り組み

ー全養成課程 206 校を対象にした調査ー

○角田 孝行（令和健康科学大学リハビリテーション学部作業療法学科）

奈良 進弘（令和健康科学大学リハビリテーション学部作業療法学科）

吉田 和弘（令和健康科学大学リハビリテーション学部作業療法学科）

谷川 良博（令和健康科学大学リハビリテーション学部作業療法学科）

永井 邦明（令和健康科学大学リハビリテーション学部作業療法学科）

Key word：養成校，地域実習，臨床実習

【緒言】

日本作業療法士協会は、作業療法臨床実習指針¹⁾の中で「作業療法参加型臨床実習」を打ち出し、臨床教育の中での実習指導に見学・模倣・実施の段階を経て行うことを提唱している。養成教育校では学年ごとに「見学実習」「評価実習」「(総合)臨床実習」および「地域実習」を設定しているが、その中でも、地域実習が実習の種別として初めて明示されたのは、2020 年に施行の作業療法士学校養成施設指定規則であり、実習種別としては最も新しい。地域実習は、作業療法コアカリキュラム 2019 の中で「他職種の役割を学ぶこと、地域の方へ指導・援助ができる技能を身につけること」が目的として提示されているが、地域実習の期間・内容・到達目標などは各養成校に一任されているという現状がある。

そこで、全国の作業療法士養成課程のある学校(206 校)を対象に地域実習についてのアンケートを行った。単位数や時間数だけでなく、開講時期や、実習形態(診療参加型実習で行っているか)、到達目標などを収集する。見学実習ではなく、対象を総合的に捉える長期実習でもない、地域実習を作業療法士養成校は、どう解釈し、どのように考え、学生に提供しているのかを明らかにし、養成教育上での臨床実習の質や内容を検討する。

【方法】

1. 対象

2024 年 6 月の時点で作業療法士協会に登録されている全国の作業療法士養成校 206 校を対象にした。本研究は令和健康科学大学倫理審査委員会(承認番号 24-012)の承認を受け実施した。

2. データ収集およびアンケート内容

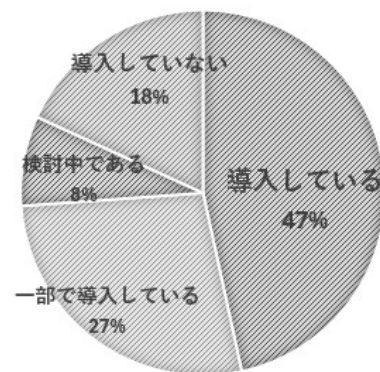
上記養成校の地域実習担当者宛に書面を郵送し、Google Forms にて回答を回収した。回収率は 42.7% (88/206 校)であった。アンケートは実施学年、単位数、総時間数などの基本情報から、到達目標、実施施設、養成校独自の取り組みや課題について聴取した。

【結果】

養成校が現在行っている地域実習の単位数は 1 単位が 87.4% (76 件)、2 単位 9.2% (8 件)、3 単位 3.4% (3 件)であった。

訪問・通所リハ以外で地域実習を行っている施設は 88 校中 43 校 (48.8%)あり、内訳は介護保険領域 70.8% (34 件)、訪問看護 33.3% (16 件)、小児福祉(放デイ等)領域 27.1% (13 件)であった。

現在は使用していないが、指定規則が変われば、今後、学生に経験させたい実習施設として、訪看や福祉領域だけでなく、就労支援施設 (82.8%)、学校作業療法 (52.9%)、行政関連活動 (50.6%)、司法作業療法 (39.1%)などが挙げた。



n=88

図1. 地域実習で作業療法参加型臨床実習を導入しているか

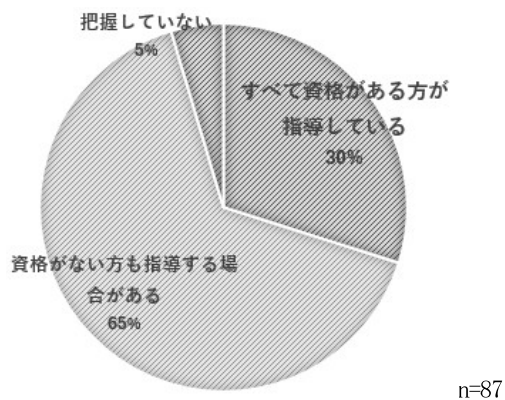


図2. 地域実習の指導者「指導者講習会」を修了者か

また地域実習で作業療法参加型臨床実習を導入している養成校は47.0%（41件）（図1）、その実習指導者で「臨床実習指導者講習会」を修了した資格のある者は29.9%（26件）に留まった（図2）。その理由として64.8%（57件）の養成校は「地域実習を見学実習として扱い、資格が無くても可能と考えている」ことが分かった。

養成校が最も重要視している実習目標は、地域における作業療法役割63.2%（55件）で、地域で暮らす方の生活の実際13.8%（12件）であった。また、独自の取り組みとして現行の地域実習とは別に、幼稚園、保育園、高齢者サロン、認知症カフェ、少年院などで実習を行っている養成校があることも分かった。

【考察】

2020年に施行された指定規則上で地域実習は「一単位以上行うこと」「通所、または訪問リハビリテーションに関する施設で行うこと」という指定がある。地域実習は見学・評価・総合実習とは違い、これらの施設で実習を行うことを指している。

ほとんどの養成校は1単位（1週間）で地域実習を構成しており、訪問・通所リハ以外で地域実習を行っている施設は88校中43校（48.8%）存在し、養成校は、今後指定規則が変われば、就労・学校・行政・司法などの領域を学生に経験させたいと考えている。

養成校は指定規則で提示された内容を独自に解釈し、様々な地域施設に実習に行かせていることが分かった。また、ほとんどの養成校は実習を1単位で

構成し、見学レベルの実習に終始している。そのため臨床実習指導者講習会を修了していない者が実習の指導をしているケースが多いことが明らかになった。これらのことから、問題点を3つ提示する。

地域で活躍する作業療法士は多い。しかし、施設が限定されていることで、本来的な地域実習が行いにくいという課題がある。

また、養成校は「地域での作業療法士の役割の理解」「地域で暮らす方の生活の実際を理解する」等を地域実習の目標にあげていた。多くの養成校では地域実習を1単位で構成している。地域作業療法における仕事の役割や生活の理解にたった1週しか期間がないことになる。果たしてその中で対象者の生活の全体像や支援との関連性、本人を取り巻く環境への視点が育つのだろうか。

最後に地域実習を「見学実習」と解釈しており、そこでの教育者は指導者講習会修了者ではないものが多いことである。講習会を受講しないと「見学时、観察のポイントを予め提示しておく」重要性が分からないだろう。そのため、現在進行形で地域実習は、旧来の見学実習レベルで展開されている可能性がある。

小林ら²⁾は「より広い視野で地域の対象者への支援や他職種連携を学ぶために1,2週の実習ではなく見学・模倣・実施のプロセスを通すことが必要」と2020年にそのことをすでに危惧していた。しかし、これらの課題に対し、地域実習の目標や内容を刷新する養成校や、地域実習とは別に幼稚園や保育園での実習を行うという新たな試み、アイデアも多数あった。地域における作業療法の実際を学生に体験させるために、提案する。まず指定規則上で指定されている施設の幅を広げること、地域作業療法の理解には1単位では足りないため2単位以上を行うこと。地域実習の指導者は指導者講習会修了者が望ましいこと、である。

医学モデルではなく、地域で展開される作業療法は、学生にとって「学生本人、指導者、そして対象者が一体となって作業療法を実施している」という実感を持ちやすい。学生は臨床実習を通じて驚くほど成長する。我々は、始まってまだ数年しか経っていない地域実習をさらに良いものにするため、学生がより良い学びの環境で成長し、地域社会に貢献で

きる専門職としての資質を高められるよう努めることが重要と考える。

【結語】

地域実習は旧来の見学実習レベルで展開されている可能性がある。また、指定される施設の幅が狭く、1 単位では足りない。また指導にあたる者は講習会修了者が望ましい。本研究は日本作業療法教育学会の研究費助成を受けて実施した。

【参考・引用文献】

- 1) 一社日本作業療法士協会：作業療法臨床実習指針（2018）作業療法臨床実習の手引き，22-31，2018.
- 2) 小林幸治，佐藤純：これからの作業療法臨床実習 地域領域における取組と展望，OT ジャーナル 54（7），650-657，2020.